

和歌山—思いやりのある世界への扉

レ・ゴック・クイン・ニュー

日本語・日本文化研修留学生 ベトナム

昨年の9月に日本語・日本文化研修留学生として和歌山大学へ留学しました。和歌山市に来る前は、ほとんどの留学生と同じように「和歌山?」、「どこにあるだろう。大阪の方? 東京の近くかな。」などと疑問を持っていました。そして、私は実際に和歌山に来て、驚きました。どのようなことに驚いたのか、それは和歌山が「郊外=田舎」だったことです。私は生まれた時からずっとベトナムのホーチミン市という人口が800万人以上の大都会に住んでいたのです、日本という発展国であれば、郊外といっても自分の住んでいるところよりはもっと洗練されていると思っていました。しかし、和歌山市には高層ビルや地下鉄などはありませんでした。そして、夜7時になると、店が閉まり、道を歩く人も少なくなります。海外の発展国の郊外のイメージは、もう少し公共交通が発達しており、夜になっても、お店が開いていて、人が行き交い、もう少し賑やかなものでした。確かに私が思う郊外のイメージとは違う和歌山でしたが、和歌山に来て自分の目で見て体験していくうちに和歌山のイメージが留学当初とは異なってきました。和歌山で半年くらい生活するうちに、それまで気づけなかったことにある日初めて気がついたのです。これから私の目から見て気づいたことを述べさせていただきます。

まず、見たことのないことについて述べます。毎日、学校に行き、授業で先生方からいろいろ教えてもらうだけではなく、困った時、悩んでいる時でも先生のところへ相談しに行けば、なんでも相談に乗ってくださいます。私も困った時先生に相談したら親切にアドバイスをしていただきました。その時教師という仕事は知識を与えるだけではないことに気づきました。和歌山大学の先生はとても優しく、いつも学生のことを考えてくださると感じています。不安だった私に教えてくれた先生が天使に見えました。まるで神様が私達留学生のために天使を送ってくれたように感じました。

次に、聞いたことのないことについて述べます。日本に来て一番難しいのはやはり生活の面だと思います。特に、生まれてからずっと家族と離れて暮らしたことがない私のような者は、外国で生活することはもちろん、家族がそばにいない生活は、精神的にも不安定になりなかなかうまくいきません。いつも1人で生活をしないといけないと思い込み、悩んでいました。

しかし、その時地域の方々から「ニューちゃん一人じゃないよ。そばにボランティアのような私達がいるから、いつでもなんでも言ってね。ニューちゃんが幸せな留學生活のために出来るだけサポートするよ。」と優しい声で言ってもらいました。なぜ血縁関係のない人なのにそのように優しいのか、なぜ皆が私のことに興味を持ってきているのか、不思議に思いました。そして、ある日理解することができました。地域の方々「留学生たちに思いやりのある心を伝えたい、日本人のおもてなしの気持ちを持って世話をしあげたい」という思いで私達に接してくれているようです。



最後に、最近の経験からお話ししたいと思います。6月に入り、湿度も高くなったので、肌が敏感になってしまい、腕に蕁麻疹のような赤い湿疹ができ、痒くなりました。泣きたいほど怖くてたまらなくなりました。「どうしたらいいのだろうか。」と頭の中で自分の嘆く声が聞こえました。学校に行き、勉強する気になれませんでした。なぜ留学生活がそのように苦しいのか、消極的なことばかり思い浮かんできました。授業が終わってから、日本人の先生が来て、優しい声で「ニューちゃん、何か困っていますか。顔がちょっと元気じゃなさそうです。何か起こりました？先生に言うてみたら？力になりますよ。」と聞いてくれました。

もう一つは一ヶ月前に風邪を引いて高熱があった時のことです。その時は地域の方に電話し、いい病院を教えてもらいたいと尋ねました。その後、私の住んでいるマンションに迎えに来て、病院に連れて行ってくれました。まるで第二のお母さんのように感じました。優しくて温かくて、留学生たちの心を温めてくれる方です。

留学した当初は見た目では都会か田舎かというこだわりを持っていましたが、和歌山で生活するうちに、高層ビルがあるとかお店がたくさんあるとかより、もっと大事なことがあるということに気づかされました。それは全て和歌山の人から注いでもらっている愛情が基になっています。それを感じながら、毎日前へ進み、頑張りたいと思っています。私が頂いた思いやりや愛情は他の留学生にも伝え、思いやりのある世界を作っていきたいと思っています。

